

十九世紀宣教師文書から見た客家 (Hakka)

飯 島 典 子

はじめに

客家という名称は、通常“Guest People”又々“Stranger”と訳され、中国内外に紹介されてきた漢民族の一支を指す。「從來甚だ土着の蔑視を受け、彼を漢族に非ざる蠻種⁽¹⁾」として見られており、客家を区別する唯一の方法はその言語である⁽²⁾とは言うものの、客家の生活についても粵東（嘉應州一帯）と粵西⁽³⁾（廣西東部、昭平、平樂一帯）では甚だしい差異がありその集団としての定義は容易ではない。多くの少数集団同様、客家も外部の人間から根拠の無い蔑視の目で記述されることが多かった。戦前の日本人による客家紹介として例外ではない。例えば一九二六年、服部宇之吉氏の『支那の国民性と思想』の中にも客家に触れた

一節がある。

廣東に居る一種の民即ち客家（西洋人はHakkaと綴る、廣東音で左様と呼ぶ）は民國前までは身家不清白であつて清白になるを得ざる者であつた。此民は始終ボートの中に生活して陸上に生活せぬ、歴史は能く分からぬが可なり古い時に廣東に移つて來たものらしい（後略）⁽⁴⁾。

二 讀して分かるとおり客家が水上生活者の蛋家と混同されている。やがて客家は日本の華僑事情紹介にも客人の名称で登場する。一九二九年には既に外務省が客家の中国及びマレーシア、インドネシアに於ける分布を把握していた⁽⁵⁾。一九三〇年、山口縣造氏が雑誌『東洋』に発表した「客家と支那革命」が蛋家（蛋戸）と客家の混同を正し、且つ

中国国内の客家の分布、太平天国、辛亥革命と客家人の関わりに触れ、当時の国民党、共産党要人に多数の客家人が存在するとしてその政治的影響力について述べたのは当時としては画期的な見解であり、このように日本国内だけでも客家に関する記述は蔑視、少数民族との混同等毀誉褒貶が錯綜していた。こうした混沌とした客家観の体系化を試み、世に問うたのが一九三三年に刊行された、羅香林氏の『客家研究導論』である。その最大の問題提起は客家を漢民族の一支とする主張にあり、従来の客家イコール非漢民族論に反論した意義は大きい。⁽⁷⁾

一方客家自身の自己像は、中川學氏が『客家論の現代的構図』で指摘しているように、「客家ナショナリズム」という言葉があるくらい客家中国人には強烈な団体意識と中華の正統觀念が受けつがれている。⁽⁸⁾客家の族譜もその起源を古代の周ないしそれ以前に原籍を立てる例まであり、こういった族譜から事実を割り出すのは容易ではない。

それでは客家はいつ頃からその存在が他者の目を通して知られるようになったのか。清代の縣志や地理誌ではとかく客家と広東人の武力衝突(械闘)が取り上げられるが、それ以外の観点から客家を扱った史料として西洋人宣教師

の著書や報告書に着目すると示唆的な二点が見つかる。各々の文献は順次紹介するとして、第一に彼等が来華して比較的早い時期(一八三〇年代)に既に客家と広東人を区別して記録している点、第二に彼らが客家の存在には気づきつつも必ずしも呼称が *Hakkas* に統一されていなかった点である。西洋人宣教師は中国と東南アジアを頻繁に往復し、本土の中国人と東南アジアの中国居留民の双方を観察する機会に恵まれていたのか、縣志に現れない貴重な記録を本国への報告書という形で提供してくれている。

羅氏は『客家研究導論』の中で客家を世に知らせたアイテル (E. J. Eitel)、ダイヤー・ボール (Dyer Bell) ⁽⁹⁾ といった西洋人の名を挙げているが、彼らが客家を知るに至った経緯については触れていない。⁽¹⁰⁾更に彼は客家の語を永久不変の呼称のように用いているが、十九世紀の英文による宣教師文書に当たってゆくと、後述するように *Hakkas* の語は十九世紀末になってやっと文献に登場する。羅氏のモデルに範をとり、客家という明確なまとまりをもった実体が存在するという学術的言説は既に疑問視されて久しい。⁽¹¹⁾

本稿は清代の来華西洋人が、いつ頃客家の存在を知り、

如何なる集団として把握していたかの変遷を検討し、広東客家像の一端を描いてみようとする試みである。

一 西洋人宣教師の初期伝道記録にみる「客」の記述

(一) 初期伝道中に現れた「客」

広東省は中国全土の中でも新教伝道においては最も古い歴史を有しており、キリスト教布教の最も盛んな所であった。⁽¹²⁾ プロテスタントの布教活動は一九四〇年の時点でカソリック五宗派に対しプロテスタントは三十五宗派が活動していたのでいきおい後者の方が広東事情に関する報告が量の点で勝っていた。こうした事情の下、本論もプロテスタントの資料を中心として議論を進めている点を予め断っておかねばならない。

管見の限りこうした宣教師達が一番早く客家らしき集団に言及したのは清初に遡る。北京のあるイエズス会宣教師が台湾で起こった朱一貴の乱(一七二一年)に関し、叛乱軍を「福建とケウミイ (Keoumi) の漢人の支援を受けた土地の漢人」と書簡で説明しており、勿論 Keoumi は即客民⁽¹⁴⁾なのかという短絡的な結論は避けねばならないが、台湾には既に客家人が移住していたのは事実である。⁽¹⁵⁾

初めての来華プロテスタント宣教師としてロバート・モリソン (Robert Morrison) が中国に到着したのは一八〇七年、嘉慶年間(一七九五—一八二〇)で広東を除けば一般欧米人の入国は禁止されていた時代だったので来華宣教師は当面布教のターゲッ⁽¹⁷⁾トを東南アジアの中国人居住区に求めたのである。布教上の必要から様々な中国方言を聞き分け、操らねばならなかった宣教師が自ずから客家を先ず一つの言語集団として認識したであろう事は想像に難くない。注目すべきは宣教師が当初閩南音の客「Kee, Kneh」を用いている点である。

勿論「客」もそのまま客家を指す場合ばかりではないので、ここで客を定義することの難しさにも触れておきたい。客の名を冠する集団には客頭、水客など他にも多数あり、時には畬客、客獐など少数民族に「客」が付くこともあって「客」は常に客家の同義語ではない。ただ広東の縣志では主に省の東北部で、潮州語と客家語の混在する潮州や、「純客家語圏」とされる広東省東北部の嘉應州から移住してきた者を指して客民と呼んでいるので、清代広東に関する限りこうした地域の出身者を客家語話者と考えても差し支えないであろう。本論では広東出身でありながら広東語

以外の言語を話したり、広東東部の出身者など、ほぼ客家語圏出身者と推測出来る人々、乃至明確に Hakka と記された人々を対象として括り、彼等が如何なる集団として捉えられたのかを考察してゆくこととする。

(一) カール・ギュツラフの客家紹介

中国・東南アジアの新教伝道と客家の接点を考えるに当たり、数多くの宣教師の中でも客家ととりわけ深い関わりをもったのは元来オランダ伝道会 (Neitherland Missionary Society) に属していたカール・ギュツラフ (Karl Gutzlaff 一八〇三—一八五二) であろう。中国のキリスト教研究では屡々名の挙がる彼も、客家との関わりではあまり名が知られていない。ドイツ生まれの彼は英・独・蘭・仏語に通じ、アジアの言語においてもマレー、シャム、ビルマ語に聖書を翻訳している⁽¹⁹⁾ので、東南アジアで話される様々な華南方言の相違に気がついたのかもしれない。彼自身による英文著書でギュツラフが最初に客家とおぼしき集団について触れるのは *The Journal of Two Voyages Along the Coast of China in 1831 & 1832* での在タイ中国人居住者について触れるくだりである。

「(タイにおける) 中国人の大半は広東省の東部、潮州府 (Chau-chow-foo) から来ている。彼らの殆どは農民であるがもう一つ別の Kin 乃至 Ka と呼ばれる人々は主に工匠である⁽²⁰⁾」と記し、更に同書後半では海豊付近の人々についての記述がある。

「我々はぼろを纏い、生活必需品にも事欠きながら陽気で話好きな貧しい人々と長話をした。彼らは住民が広東の他のいかなる地方よりも北京語に近い方言⁽²¹⁾を話す Ka の出身である。彼らは勤勉な耕作者、床屋、鍛冶屋、大工である。人口が過密なので彼らは故国を去って外国、特にインドネシアに赴いている。パンカ島とボルネオでは主として鉦夫であり、シンガポール、バタビアでは職工である。彼らは台湾内陸部の大半に居住し、床屋や使用人として広東全土に散らばっている⁽²²⁾」。

上述の Kin, Ka という人々が果たして客家語話者なのかについては多少時代が下がるが一九三〇年の蘭領インドネシアでも華僑の主な出身地である華南の語族分布図で Kheh と呼ばれる人々と Hakka を同義語として扱っているオランダの報告があるので、インドネシアに関する限り⁽²³⁾ Kin, Ka が客家の同義語である可能性は高い。後にギュ

ツラフは一八三八年、その著書 *China Opened* にも類似の記述を載せている。

「広東からの移民の中に北京官話に近い方言を話す *Kea-jin* という人々があり、職工や農業者として卓越しているが、商業には殆ど従事していない。彼等は台湾内陸部に居住し、バンカでは鉱夫であり、オランダ植民地の近辺であるボルネオのポンティアナックに共和国を創立した。」⁽²³⁾

ここに出てくる *Kea-jin* であるが、結論から言うとい七七七年ポンティアナックに設立された蘭芳公司は確かに嘉應州人の鉱山労働者を中心とした組織であり、バンカ、ポンティアナックと台湾に共通の方言を見出したのは、東南アジア各地を布教したギョツラフの鋭い観察のなせる業である。

次にバンカの中国系鉱夫であるが、これに關しては一九四三年、台湾銀行東京調査部が『スマトラ概観 其四——スマトラの鑛業』の中で触れているので以下に一九四三年の時点での、バンカにおける錫鉱山関係者の内訳を示してみた。(表1 参照)

こうしてみるとギョツラフの言う *Kin*、*Ka* はほぼ現代の「客家」と重なっていよう。以後、「客」に触れた記録

として中国初の英文刊行誌チャイニーズ・レボジトリイ(以下CRと略)にも注目すべき記事が見受けられる。一八三九年、ドティ(*E. Doty*)とポールマン(*W.J. Pohlman*)という二人がボルネオを訪れた際の記事に二人が

サンバス川河口の東岸、一マイルほどのところにあるプマシカ(*Pumangkai*)という中国人村落を訪れた記事によると、この村は出来て九年ほどになり、村長に会見した時、彼はマレー語が拙く、福建語は全く話せなかった。住民の殆どは客方言(原文は *Khen dialect*)を話し、その中に

福佬人(福建の福佬方言話者)が混住し、人口が千人を超えると書かれている。⁽²⁵⁾更にサンバスの住民は百五十人あまりで殆どが客方言を話す商人で、⁽²⁶⁾モントラドでも客語が話されていることにも触れ、⁽²⁷⁾ポンティアナックの支流、カマンドールで広東人と自称するが、客語を話す人々がいるというものである。⁽²⁸⁾この時点で「客」という名称はCRの読者である在華西洋人の共通した認識だと思われる。

一八四七年、ギョツラフの依頼に応じてスイスのバーゼル教会(*Missionary of the Basle Evangelical Society*)からはセオドリー・ハンバーグ(*Theodore Hamberg* 一八一九—一八五四 漢名韓山明)とルドルフ・レヒラー

表1 バンカ居住の華僑人口

僑生 移住先で生まれた中国移民

新客 新来の中国移民で特別に客家を指すわけではない

	客家	広東人	広西人	杭州人	その他	不明	合計
僑生	19,733	5,654	3,031	2,749	24,758		55,904
新客	5,046	8,761	8,736	4,887	12,506		39,936
計	24,824	14,441	11,768	7,658	35,149	2,258	96,098

資料来源『スマトラ概観 其四 スマトラの鉱業』

臺灣銀行東京調査 1943年 70-71頁。

(Rudolph Lechler 一八二四—一九〇八漢名黎力基) の二人の宣教師が香港に到着した。⁽²⁹⁾ 一八五二年、ハンバークらは専ら客家に向けて伝道する旨を決定し、数あるプロテスタント宗派の中でも客家ととりわけ密接な関わりを持ったのである。⁽³⁰⁾

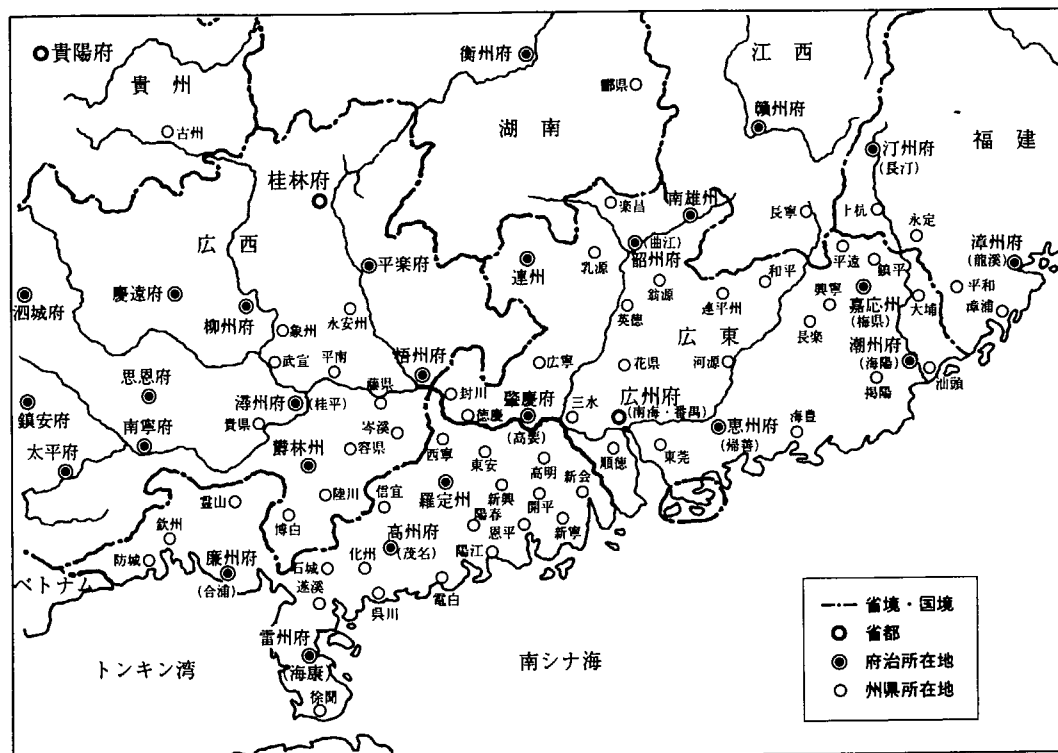
二 アメリカンボード(美国公理会)の初期客家認識

(1) パーター・パーカー (Peter Parker) の見た「海南島人」

ギュツラフとバーゼルが主にドイツ語圏の宣教師を動員して客家と接触していた一方、英語圏では前述のモリソンの依頼を受けて一八三〇年にアメリカンボード(美国公理会)⁽³¹⁾ が主に香港の隣接地である広州、開平、佛山、赤溪、香山で活動を開始していた。⁽³²⁾ 広州一帯にも客家話者が居住している以上、何らかの交渉があったと考えられる。

ギュツラフが一八二七年から一八三〇年代前半にわたって既にアメリカンボードとも交渉を持っていた様子は、ピーター・パーカーを中心とするアメリカンボード初期の報告記録にギュツラフの名が散見していることから窺え、⁽³³⁾ 又パーカー自身、それと知らずに客家と接触した可能性が

図二 清代の広東



菊地秀明『広西移民社会と太平天国』風響社1998 13頁より

ある。一八三五年四月、彼は海南島人のジャンクを訪ねた際の報告書に「(私が接した海南島人の言語は) 福建のそれとも異なっている」⁽³⁴⁾と記している。広東に在住していたパーカーは当然広東語が話せ、⁽³⁵⁾福建語の知識も持ち合わせていたので広東語でも福建語でもない言語を判別出来たのであろう。⁽³⁶⁾この海南島の人々に関心を抱いたのか、彼は更に同年九月の記録でも海南島人の生活に触れている。

「海南島の北部と東部には福建西部の Chin Chu (汀州?) から来た人々が居住しており、彼らは中国の官吏によって治められている。(中略)(彼らが) 勤勉で、進取の気性に富み礼儀正しい人々である所に大いに興味を惹かれた」⁽³⁷⁾。

宣教師と中国人の接触に当たっては後者が何らかの援助保護を求めて接近する事例がよくあるが、ここでは寧ろパーカーの方が積極的に相手に興味を示している。Chin Chu の綴りを即汀州としてよいか否かについても慎重な検討を要するが、福建西部でこの綴りに相当する地名は他にこれといって他に見あたらない。⁽³⁸⁾彼らが客家語話者であったかは海南島で話されている言語全体から判断せねばならない。時代はかなり下がるが、一九三九年日本の同島

に於ける漢人の言語状況報告では以下のように整理されている。

僑人 福建の漳州及び泉州語に似る

臨高人 臨高語 (臨高は海南島にある地名)

軍人⁽³⁹⁾ 普通の支那語

客人 東江客語⁽⁴⁰⁾

このように漳州及び泉州語系ではない言語を話し、客家語圏である福建西部の出身者となれば、これが消去法的にも客家語話者を指している可能性は高い。

客家の存在を大々的に内外に知らせるきっかけになったのは周知の通り太平天国の乱であるが、この時点でも在華プロテスタント各派の客家認識には未だ差が見られる。

「洪秀全の幻想 (The Visions of Hung-Siu-Tshuen)」を著したバーゼルのハンバーグに対し、アメリカンボードでも、ブリッジマンが (E.C. Bridgman) 一八五四年に太平天国の首都天京を訪れて六日間滞在し、彼らの政体、社会的規律についても報告を発表しているが、太平天国を構成している人員、洪秀全を中心とする指導者の背景といった詳細には触れていない。⁽⁴¹⁾

ギュッラフとアメリカンボード関係者の観察に共通して

いるのは、その言語故に広東語話者とも福建語話者とも異なる集団の存在に気づき、彼等の出身地と思われる地名で彼らを定義づけようとしている点であるが、ただ後者はまだ「客」の語を用いていない。こうした認識の差は宗派もさることながら寧ろ接触した地域が要因となっているようで、宣教師ならずとも東南アジアの華僑分類では屢々明確に広東人と「客」(Khek, Kex は閩南方言音)が区別されている。また稿を改めて触れたいが、実は広州一帯の縣志で「客」の語が頻出するのは咸豐年間(一八五二—一八六二)初頭以後なのである。いずれにせよ、宣教師の中でも宗派や活動地域を超えた「客家」に対する共通の認識はまだ完全には形成されていない。

(二) アイテルの見た客家混住地区——博羅

一八六五年、後世客家の紹介者として有名なアイテル(Ernest Eitel)が前述のパーゼル教会を脱会して新たにロンドン伝道会(London Missionary Society)に加わり早速翌年一月には博羅(Poklo)から同会に報告書を送り、客家語に言及している。博羅はパーゼル教会のホームグラウンドとも言える広東東北部とアメリカカンボードのそ

れである西江デルタの中間を繋ぐ東江下流に位置し、言わば土・客の力関係が伯仲している地域である。アイテルの博羅報告書から客家に関する部分を抜粋してみよう。

(博羅で)最初に定住して土地の権利を我が物にしてきた自らを本地と呼ぶ住民は、他の侵入者——福建からの福佬と客家——に対し、四世紀もの間悲痛な戦いを続けてきた。これらの二民系は実際の所言語風俗に於いてあたかもサクソン、デーン、ノルマン人のように本地と互いに全く異なっている。(中略)分布については東南部に福佬、東北部に客家が支配的であるが、残りの地域にも分布している。(中略)山間の小村では本地に小作料を払ったり、大きな村になると本地と闘争する。博羅は客家が本地、福佬と混住する地域の一つで、客家の言語風俗が(この中に)混在している。博羅には客家語のみ、本地語のみ、又は福佬語のみが話される集落があるが、何処においても客家語は解されており、(客家語の他に)本地と福佬が解される地域もあり、そこに客家語の音と語句が混在している。博羅の縣城と他四つの大きな町で話されている方言は本地でも福佬でもなく、三者の音の混成であるが、面

白いことに本地の声調だけが、他二者と異なっている。

(中略)

博羅における住民の特色は客家のそれに共通するもの——粗野、勤勉、官吏の権威に対する強烈な憎悪、武力によって全ての争いを解決したがる強い傾向——がある。彼らは（これが客家を指すか、博羅住民を指すかは不明瞭）普通泥で建てた見窄らしい家に住み、衣服も粗末なもので清潔な住居やござっぱりして快適な衣服より、よい食事の方を渴望しているのである。⁽⁴³⁾

彼が客家語に注目していたのは、元パーゼル教会所屬という背景もさることながら、多少方言の差こそあれ、客家語の均一性が、何処で活動しようとも布教の便に供したという実利的な背景も見逃せない。⁽⁴⁴⁾ 取りわけ一八八〇年代以降ロンドン伝道会の博羅に関する報告書には Hakka の語が散見される。⁽⁴⁵⁾ こうして見ると東南アジアの「客」とは異なり Hakka の語は博羅など、客家語話者が数多く存在した広東東部で宣教師が採取した可能性が大きく、そこには客家を専門に布教したパーゼルの影響を見ることが出来る。

三 客家に対する認識の広がり

アメリカンボードで、パーカーの後に客家に関すると思われる記述が現れるのは一八四八年、ダイヤー・ボール (Dyer Ball) による報告書で周囲の中国人について、「異なる方言を話す故にある意味でよそ者 (原文は *foreigners*) であり、省の東北から来て、広東人よりも外国人に対して友好的である「Teo Chew 人」⁽⁴⁶⁾と述べている行である。これまでのアメリカンボードの報告に共通しているのは広東語話者とも福建語話者とも違う人々を把握しようとしている点であるが、同派が広東発の報告書で初めて客家という言葉を使うのはチャールズ・ハーガー (Charles Robert Hegar) が一八八六年陽江 (Yang kong) から送った書簡で「二十二年程前、客家 (中国人の一支族で、北方から来た侵入者と見なされている) がこの付近の村々を破壊し、その痕跡が今でも残っている」と述べたものである。⁽⁴⁷⁾

ハーガーはスイス生まれで米国に帰化し、在米のドイツ組合教会員から助手を募ったりアイテルと交渉があった様子が窺え、パーゼルとの関係もあって以前のアメリカン

ボードの宣教師に比べると、客家について詳しい知識を得る下地があった。これまでとかく断片的だったアメリカンボードの客家認識がバーゼルとより密接な交渉を持つハーガーの時代になって多少なりとも俯瞰的になったのである。こうして雑多な名称でしか認識されていなかった客家を、「海峡ではKhek(ないし)Keh(訳注 Khek' Kehは閩南方言音)の名で知られ、汕頭と廈門の発音はHak(訳注 広東語、客家語共に発音はHak)である」と世に知らせたのはダイヤー・ボールの著書 *Things Chinese* であるが、それには一八三〇年代初頭のギュツラフによる客家発見から同書が出版される一八九三年までおよそ六十年の年月を要していた。

客をHakと発音するのは客家語も広東語も同様だが、ギュツラフらが記したKin、Ka、Knekは閩南語であり、西洋人は専ら福建人の認識を介して客家を知った事になり、何故専ら閩南音ばかり記録されているのかは更なる考察が必要である。

むすび

ギュツラフは客家伝道のパイオニアでありながら生前そ

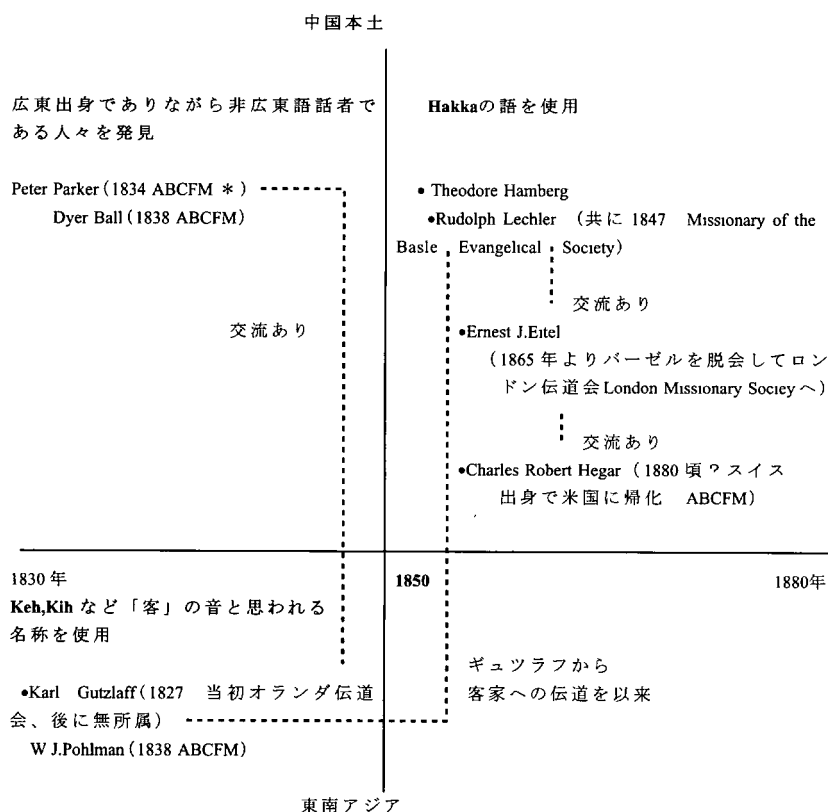
の英文著書では専らKinやKakの語を用いている。同時代のアメリカンボード関係者も永らく明確な名称を用いていない。只両者に共通しているのは東南アジアの客語話者の存在を把握している点である。一方、客家語圏の一つである潮州では、時代を少し遡った乾隆年間(一七三六—一七九五)の『潮州府志』にもまだ「客」の記述は見あたらない。⁽⁵⁾乾隆・嘉慶年間の中国官憲はまだ「客」の存在に対してもまだ殊更に注意を払っていないのである。ここで宣教師と「客」に関する呼称の関係を図三にまとめてみた。

一見して分かるようにKekは主に東南アジアでの呼称であり、中国本土で十九世紀末にやっとドイツ語圏出身者を中心としてHakkaの名称が使われ始めている。

前述のように、中国側の史料で客の名が頻繁に登場するのは土・客の械闘が激化した咸豊年間からであり、その後、太平天国がきっかけで客家は更に中国内外から注目されるに至った。それに先行して一八三〇年代から東南アジアのパンカやボンティアナック等で客家語話者が大勢を占める居住地を築いたのと、広東語や福建語とも異なる言語で西洋人宣教師の注目を集めたことが西洋人による客家研究の発端になったのである。

(31) 十九世紀宣教師文書から見た客家 (Hakka)

図三 客家布教に携わったプロテスタント宣教師関係図



()の中は入華年代及び宗派

• ドイツ語話者

特に印の無い人名は英語話者である

* the American Board of Commissioners for Foreign Missions の略。中国名は美国公理会という米国の海外布教団体の名称である。

- (1) 彭阿木「客家の研究」『支那研究』二十三号、一九三〇年、一四五頁。
- (2) 外務省情報部編集『支那民族史』一九二七年、三三二頁。
- (3) 彭阿木「客家の研究」『支那研究』第二十二号、一九三〇年、七十七頁。また現代の文化人類学的視点からの研究として、瀬川昌久氏の『客家 華南民族とそのエスニシティ』(風響社、一九九三年)第一章を参照された。
- (4) 服部宇之吉『支那の国民性と思想』京文社、一九二六年、二十三頁。
- (5) 外務省通商局『華僑ノ研究』一九二九年、八十九頁。
- (6) 山口縣造「客家と支那革命」『東洋』第三十三期十月号、一九三〇年。
- (7) 羅香林『客家研究導論』上海文藝出版社、影印本初版一九三三年、七—八頁。
- (8) 中川學『客家論の現代的構図』アジア政経学会 現代中国叢書 一九八〇年、二頁。
- (9) 中川學、前掲書、四十三—四十四頁。
- (10) 羅香林、前掲書、四頁。
- (11) 瀬川昌久、前掲書、三十一頁。
- (12) 臺灣總督府外事部、臺灣總督府外事部調査第九十二(一般部門第十四)『南支那綜覽』一九四三年、四五—五頁。
- (13) 『南支那綜覽』四四九—四五〇頁、四六四頁。
- (14) 矢沢利彦『イエズス会士中国書簡集四 社会編』平凡社 東洋文庫二三〇、一九七三年、一〇一、一〇三頁。
- (15) 清代広東では客家は屢々客民とも称されていた。
- (16) 陳運棟『台灣的客家人』臺原出版社 一九八九年、九十六—一二頁。
- (17) 日本基督教団出版局『アジアキリスト教の歴史』一九九一年、一四二—一四八頁。
- (18) 『増城縣志』、嘉慶庚午重修 卷一—九 客民。
- (19) 都田恒太郎、『ロバート・モリソンとその周辺——中国語聖書翻訳史——』教文館、一九七四年 二二—二頁。
- (20) Gutzlaff, *Journal of Two Voyages along the Coast of China in 1831 & 1832* p.29
- (21) Gutzlaff, *Ibid.*, p.128 *Chinese Repository* (以下CRと略) vol.1 Gutzlaff's *Journal* May 1832, p.23.
- (22) *Volkstelling 1930 Deel VII Census of 1930 in the Netherlands Indies* Departement Van Economische Zaken 1935 Batavia p.87.
- (23) Gutzlaff, *China Opened: or Display of the Topography, History, Customs, Manners, Arts, Manufactures,*

- Commerce, Literature, Religion, Jurisprudences, etc. of the Chinese Empire* Revised by the Rev. Andrew Reed, D.D. London, Smith Elder and Co. 65, Cornhill 1838. Topography of China Proper, Kwang Tung Province p. 132.
- (24) 一七七七年、ボルネオのボンティアナックで広東省嘉應州出身の羅芳伯が鉾山労働者を中心とした共和制をとる自治政府を設立し、彼は大統領に当たたる大唐総長に就任している。詳しくは羅香林『西婆羅洲羅芳伯等所建共和国考』中國學社（一九六一年）を参照。
- (25) CR vol VIII 1839 Tour in Borneo pp.283-284.
- (26) CR 前掲書、pp.284-285.
- (27) CR 前掲書、p.304.
- (28) CR 前掲書、p.307.
- (29) 亀谷莊司、『最初に聖書を日本語に翻訳したカール・ギュッラフ伝』発行所不明、一九五七年、青山学院大学所蔵、五十二頁。『香港崇貞會荷箕灣崇貞堂開基一一五周年紀年特刊 一八六二—一九七七』香港バプティスト大学基督教在華發展史文獻部所蔵 六頁参照。
- (30) 『崇貞會百週年紀念特刊』湯兆靈牧師存本、香港バプティスト大学 區樹鴻圖書館所蔵、出版年不明 九十三頁。
- (31) アメリカン・ボードはアメリカのコングリゲーション・チャーチ派によって設立された海外伝道機関で、一八〇年に、その海外伝道機関 (American Board of Commissioners for Foreign Missions) が設立された。同派はモリンの所屬していたロンドン伝道会 (London Missionary Society) の姉妹団体でもある。都田恒太郎、前掲書、六十三—六十四頁参照。
- (32) 梁家麟『廣東基督教教育 一八〇七至一九五三年』建道神學院 一九九三年、八〇頁。
- (33) 本論で取り上げるアメリカンボードの報告書は正式名称を *Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, Missions to Asia, South China Mission ABC 16.38* (ハーバード大学ホートン図書館、東京女子大学比較文化研究所所蔵) と言い、一九七七年ハーバード・イエンチン研究所に客員教授として滞在中であった中川學氏が閲覧し、その教示を得て筆者も閲覧した。この文書は全てマイクロフィルム化されているので、本論ではリール番号で記載する。Reel 256 no.0126, 0197, 0210, 0251-2, 0259, 0261, 0264-5, 0267-8, 0271, 0283, 0286, 0288, 0290, 0294, 0304。
- (34) Reel 256 no.0586 1835.4.20 (1835) 参照。
- (35) ジョナサン・スペンス著 三石善吉訳『中国を変えた西洋人顧問 *To Change China Western Advisers in China*

1620-1960』(講談社、一九七五年)、五十五—五十七、六

十三—六十四頁。原著はSpence, Jonathan

To change China Western Advisers in China 1620-1960
Boston, Tronto, Little, Brown and Company 1969°

(36) Reel 265 no.0514°

(37) Reel 256 no.0651 原文には Hai-Nan (South Sea) と
ある。

(38) 汀州は福建の西北部に位置しこの地も客家語圏である。

羅香林「客家源流考」(香港崇正總會編印『香港崇正總會
三十週年紀念特刊』一九五十年)、五十七頁。客家分布地
圖参照。

(39) ここで言う軍人は軍話という福建省武平方言の話者を
指している。蔡驊『汀江流域の地域文化に関する研究』一
橋大学、言語社会研究科博士論文 二〇〇〇年、二十五—
二十六頁。

(40) 東亜研究所第一部自然科学班『海南島ノ農業(附海南
島日誌)』一九三九年、六十八頁。

(41) *The North China Herald, Shanghai, Saturday, July*
22nd, 1854 vol.IV, No.208°

(42) *Council for World Mission Archives 1775-1940 on*
Microfiche London Missionary Society South China In-
coming Letters (米国イエール大学神学部図書館所蔵)

以下LMS報告書と略) 1868-1881を新たに整理、要約し
た目次による。

(43) LMS報告書 Fiche No.129°

(44) 『赤溪縣志』吳道鎔纂 一九二〇年、卷二 輿地下方
言十四参照。

(45) LMS報告書 Fiche No.178°

(46) Reel 258 No.0508°

(47) Reel 260 No.0129° 『高州府志』(清光緒十五年) 卷五

十一 紀述四 事紀七も参照されたい。

(48) Reel 263 No.669°

(49) Ibid.0144, 0166,0182, 0206, 0218, 0249, 0262,0265, 0635,
0585 Reel261 No.0610°

(50) Dyer Ball, J. *Things Chinese Being Notes on Vari-*
ous Subjects Connected with China Second Edition,
New York, 1893 p.211.

(51) 『潮州府志』乾隆辛巳重修、卷十一 風俗。

二〇〇二年 四月 一日受稿
二〇〇三年 一月 三日 レビューの審査
をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)